

聖霊降臨後第5主日 ルカ9章18―24節

〔新共同訳〕

18 イエスがひとりでお祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。19 弟子たちは答えた。『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」

21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。」

〔直訳〕

18 そして 起こった

彼がひとりで祈っていたということにおいて、

一緒にいた 彼と 弟子たちが、

そして 彼は尋ねた 彼らに 言って、

「誰で 私は、 群衆は言っているか、 あると。」

19 すると 彼らは答えて 言った、

「洗礼者ヨハネと、

だが他の者は、 エリヤと、

だが他の者は、 昔のある預言者がよみがえったと。」

20 すると彼は言った 彼らに、

「だがあなたがたは 誰で 私は、 言うのか、 あると。」

するとペトロが 答えて 言った、

「メシア 神の。」

21 すると 戒めて 彼らを、

彼は命じた 誰にも 言わないことを このことを、

22 語って 次のことを

なければならぬ。人の子は多く苦しむことが、
そして捨てられることが、長老と祭司長と律法学者によって、
そして殺されることが
そして三日目に起こされることが。

23 すると彼は言った 皆に対して、

「もしある人が 望む 私の後ろに 来ることを、

彼は捨てなさい 自分を、

そして 取りなさい その十字架を 日々、

そして 従いなさい 私に。

24 なぜなら 誰でも 望むなら そのいのちを 救うことを、

彼は失うだろう それを。

だが 誰でも 失うなら そのいのちを 私のために、

この者は 救うだろう それを」。

①ペトロの信仰告白——第一段落（18—20節）

① イエスはひとりで祈っていた

② 「そして 起こった……」はヘブライ語の構文であり、ルカはこれを好んで用いる。この構文は段落の開始や物語がクライマックスに達したときに用いられる。ここでは「イエスがひとりで祈っていたときに、弟子たちが彼と一緒にいたということが起こった」という意味であるが、イエスが「ひとりで」祈っているときに、弟子たちが「一緒にいた」というのは奇妙である。「そして 起こった」という構文を用い、さらにこのような違和感のある表現を用いることによって、祈るイエスの姿に、そこから始まるこの段落の内容に注目させようとしているのかもしれない。

③ ルカ福音書では、イエスは重大な出来事の前に祈っており、他の福音書よりも「祈るイエス」を強調する。イエスの洗礼（三二一）、十二人を選ぶ（六二二）、変容（九二八）、祈りを教える（一一一）、受難の前（二二四一）、死の直前（二二四六）。

④ 「私は誰であると群衆は言っているか」

⑤ 祈りを終えたイエスは、人々のイエスに対する見方を弟子に尋ねる。「洗礼者ヨハネ、エリヤ、昔のある預言者」というイエス像は、領主ヘロデが聞いていたものと同じであり、すでに九章七—八節に述べられている。

7 とところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば、8 「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。9 しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。いったい、

何者だろう。耳に入ってくるこんなうわきの主は。」そして、イエスに会ってみたいと思っ
た。

④イエスのうわさを耳にし、「いったい、何者だろう」とヘロデは戸惑うが、それ以降の展開を
追いかけると次のようになる。

人々のうわさ「ヨハネ、エリヤ、昔の預言者」

ヘロデの問い「いったい、何者だろう」(7―9節)

五千人に食べ物を与える(10―17節)

群衆のうわさ「洗礼者ヨハネ、エリヤ、昔のある預言者」

ペトロの信仰告白「神からのメシアです」(18―20)

⑤イエスが五千人の供食という奇跡を起こし、神の国の力を現した後にも、人々のイエス像は変
わらない。彼らはパンの奇跡の真意を悟っていないからである。ルカはパンの奇跡を、イエス
が後を追う群衆を「迎えて」、「神の支配について話し」、「癒していた」という場面から書き始
める。これらの行動はイエスの使命と生涯を要約する言葉である。マルコでは「イエスは…大
勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」
と書かれている(マコ6:34)。マルコの描くイエスは羊の群れを養う憐れみ深い方であるが、
ルカにとっては、神の支配を到来させる方である。ルカでは、パンの奇跡は神の国の有様を教
える出来事であり、人はパンを求めて苦勞するが、真つ先に見つけるべきものは「神の国」で
あることが示されている。

⑥ルカは、五千人の供食物語を中央にして、その前に、イエスは「いったい、何者なのだろう」
といぶかるヘロデの戸惑いを描き、後にはイエスは「神からのメシア」と述べるペトロの告白
を置いている。マルコやマタイとは異なつて、このように構成することによつて、この奇跡物
語は、イエスについて正しい告白を可能にする出来事とされ、ペトロの信仰告白は、ヘロデの
問いに対する答えとなる。

◎神のメシア

⑦「だがあなたがたは、私は誰であると、言うのか」という問いは、人々はパンの奇跡を見ても、
イエスに対する見方を変えることはできなかったが、確かに神の支配を見た「あなたがたは」
私を誰だと言うのか。人々とは異なる見方があるはずだ、という期待が込められている。「あ
なたがた」は強調を意味する。

⑧ペトロは、マルコでは「あなたは、メシアです」(マコ8:29)、マタイでは「あなたはメシア、
生ける神の子です」(マタイ16:16)と告白している。「生ける神の子」はマタイによる付加であ
る。ペトロの告白は使徒を代表するものであり、イエスの地上の生涯における決定的な転換点
を示している。群衆はイエスが誰であるかを捉えることができないが、弟子たちはイエスがメ
シアであることを最初に告白する。

㉞ 新共同訳は「神からのメシア」と訳す(使三20)。2章26節の「主が遣わすメシア」の直訳は「主のメシア」である。「主のメシア」は民の救いのために主が聖別した者を意味する。イスラエルの王は神に選ばれた者であり、救いのために聖別され、神の国を打ち建てるべきメシアである。紀元後1世紀のパレスティナ・ユダヤ教の一部のグループでは、メシアという称号はダビデの家系に属する王的指導者に用いられた。ユダヤ人の多くは、イスラエル王国を再建する政治的な王としての「メシア」を期待していた。

㉟ 使徒言行録1章によると、復活のイエスから「あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられる」と使徒たちは、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねている(5-6節)。使徒たちは「イスラエル」という空間に固執し、「この時」という時間に拘泥するが、イエスは神の国は「イスラエル」という空間を越えて「地の果て」にまで広がり、神の国が実現する「時や時期」は、彼らの知るところではなく、神の遠大な計画の中にあると教えることによって、彼らの誤解を正す。使徒たちに求められているのは、神の国の完成についての詮索ではなく、証しを實行することである。

② 沈黙の命令と受難予告——第二段落(21-22節)

㊱ このことを誰にも言わないように命じた

㊲ 使徒言行録の叙述やエマオへ下る二人の弟子の言葉を見ると、ペトロが信仰告白をしたとき、弟子たちも人々が待望する政治的「メシア」像を抱いており、「神のメシア」を捉えきれなかった可能性がある。

㊳ しかし、マルコの並行箇所と比較すると、不完全であっても、弟子たちはイエスを「神のメシア」と理解したことが示されている。マルコでは、受難と復活をイエスが予告した後に、「しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」(マコ八32-33)と述べて、イエスがペトロの思い違いを叱っている。しかし、ルカはこの箇所を削除し、「わたしについて来たい者は…」という勧めにつなげる。こうすることによって、23節以降の「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい…」を弟子たちも理解しうる、強い勧めにしている。

㊴ イエスは苦しみを受けて復活する「神のメシア」である。イエスはまず、「このことを誰にも言わないように」と沈黙を命じ、「神のメシア」に対する誤解が広まらないようにしてから、イエスが「神のメシア」としてどのような道を歩むのかを教える。

㊵ 苦しむこと、捨てられること、殺されること、起こされることがなければならない

㊶ 「なければならぬ」は、義務としての行為も表すが、ここでは行為の必然性を表す。神の意思に基づく必然性であり、「…することになっている」と訳すことができる。「起こされる」は神的受動態であり、復活を表す。

㊷ 復活だけでなく、苦しみ、捨てられ、殺されることも、すべてが神の計画に含まれている。イ

エスは真の救いをもたらすために、苦しまなければならない。「神のメシア」という表現は、神の意思に従うイエスと神との緊密な交わりを表している。

㉞「神のメシア」は、ルカ福音書23章35節にもう一度現れる。ここでは、議員たちが「神のメシアなら、自分を救え」（直訳）と、十字架につけられたイエスを冷笑する。イエスと神の緊密さは、議員たちが期待したように「十字架から降りる」という形では現されない。敵の手からイエスを救い出し、苦難から守るのではなく、むしろイエスが「苦しみを受け、排斥され、殺される」ことにイエスと神の緊密さが現されている。苦しみを経なければ、「復活」という神がもたらす救いが明らかにならないからである。

㉟三日目に起こされる

㊲「三日目」は時間概念としてではなく、神の救いの確実性を表すために用いられる。苦しむ義人は、神に見捨てられることなく、必ず救われるという意味で「三日目」は用いられる。ホセ62「二日の後、主は我々を生かし、三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる」。出一九11、16。

㉛ イエスに従う者のあり方——第三段落（23—24節）

㊳私の後ろに来ることを望む

㊴イエスの「後ろに来る」ためには、「自分を捨てる」こと、「その十字架を日々取る」こと、「私に従う」ことの三つが必要である。これらの指示は別個のものでなく、同じ一つの姿勢を描いている。

㊵イエスが神の意思に従って、「苦しみ、捨てられ、殺される」ことを担ったように、イエスの後ろに来たいと望むなら、人は「自分を捨てる」ことが必要である。「自分を捨てる」とは自分の利益になることだけを求める自分を捨てることである。

㊶並行箇所では「十字架を取る」と書かれている（マタ一六24、マコ八34）。ルカはそこに「日々」という言葉を加える。ここでの十字架は「日々、負い続ける」ものであるから、殉教を指しているのではなく、イエスの後ろに来ることによって起こるさまざまな困難を意味している。神とイエスとの交わりが苦しみを抜きにしてはありえないように、イエスとイエスに従う者との交わりも、十字架を通して可能になる。

㊷いのちを救う

㊸24節の1・2行目は、「いのちを救うことを望む者は誰でも、それを失う」と述べている。この「いのち」は、23節で「捨てなさい」と命じられている「自分」自身を指している。

㊹24節の3・4行目は「いのちをイエスのために失う者は誰でも、それを救う」と述べている。「イエスのために失う」とは、「日々、十字架を取る」（23節）ことである。日常の生活の中で、イエスの教えを守ることを意図しているだろう。そのような生き方は自分自身のいのちを守る生き方を捨てることにつながる。

㊺捨てるべき「いのち」があり、それによって救う「いのち」がある。どちらの「いのち」を生きるのかは、イエスの真の姿に出会うことができるか否かにかかっている。「イエスのために」

この世の命、身体としての生命を捨てる時、まったく次元の異なる「苦しみの後に与えられる復活のいのち」を生きたることができる。

④ゼカリヤ12章8―10節、13章1節

①ゼカリヤ書1―8章と9―14章は別の預言者の言葉だと考えられている。1―8章(第一ゼカリヤ)は紀元前五二〇年に預言活動を始めた預言者の言葉であり、9―14章(第二ゼカリヤ)はそれよりも後、おそらく紀元前4世紀前半の預言者の言葉だろうとされる。第二ゼカリヤを9―11章と12―14章に分ける見方もある。

②9節に「その日、わたしはエルサレムに攻めて来るあらゆる国を必ず滅ぼす」とある。「その日」は、第二ゼカリヤに特徴的な言葉であり、「神が歴史に直接的に介入する特別な日」を表す。エルサレムを包囲するあらゆる敵から解放されたとき、神は「憐れみと祈りの霊」を注ぐ(10節)。

③「憐れみ」と「祈り」は原文では、「貧しくて、援護を求めている者を」憐れむ」を意味する動詞からの派生語である。従って「憐れみの霊」とは出来事のうちに神の憐れみを見て取ることでできる力を表し、「祈りの霊」とはそのような神にいつそうの憐れみを祈り求めさせる力を指すと言える。

④「彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ」(10節後半)。この文章には二つの解釈がある。

①「わたし」は神を指すが、「刺し貫いた」を神への反抗を表す比喩的な表現とする。

②「わたし」は神がご自分の代理者として派遣した者を指しており、神にとっては「わたし」と呼べるほどに親しい間柄の存在を指す。

どちらの解釈に立つにせよ、「憐れみと祈りの霊」を注がれた民は、神から遠く離れていた自分たちに気づき、真心からの悔い改めに導かれ、「大きな嘆き」に包まれる。そこで、神は民のために「罪と汚れを洗い清める一つの泉」を開くことになる(ゼカ一三一)。

⑤「神のメシア」と告白する

①五千人の供食を見ても、イエスが誰であるかを人々は捉えることができない。パンの奇跡を行うイエスが「神のメシア」であると告白することができるようになるためには、「ひとりで祈るイエス」と一緒にいること、神との交わりの中で生きるイエスが行った奇跡であることに目を留める必要がある。

②ゼカリヤ書は、神が「憐れみと祈りの霊を注ぐ」と語る。出来事のうちに神の憐れみを見て取る力と神の憐れみを祈り求める力は、神から注がれる。パンの奇跡のうちに、自分の求めるメシアを見て、神から遠く離れた者になるのではなく、その出来事のうちに神の支配を見て、「神のメシア」に出会うことが求められている。

③イエスは「神のメシア」、しかも「苦しむメシア」である。人が抱く期待や通念に縛られているかぎり、イエスの真の姿を見ることはできない。苦しみを経てはじめて知ることのできる「いのち」を、イエスは従う者に約束する。それは「日々」十字架を背負うことによって始まる。